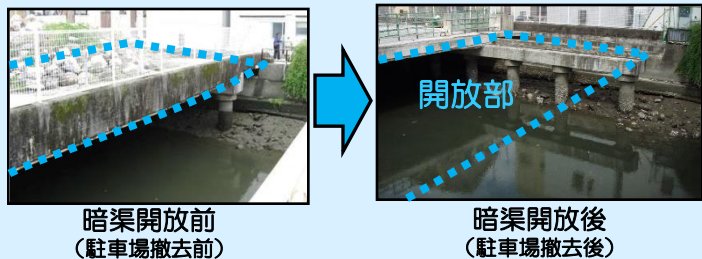


新堀川自然環境観測の検証結果

目的

県では、新堀川の暗渠部を開放し、光が当たり始めることにより、自然環境がどのように変化するのかを確認するため、平成20年8月に新堀橋北側の駐車場を一部撤去し、主に夏季に9年間、開放部の環境の変化を観測しました。



観測場所

調査結果を比較するため、以下の3箇所(すべて東岸)で観測を行いました。



暗渠開放部の環境変化

【光環境の改善による効果がみられた項目】

- チゴガニ等の甲殻類が、干潟に生息する動物の餌(微細藻類)環境が向上したことにより、駐車場撤去以降、継続的に確認されています。
- コアマモ(光合成生物)は、平成25年に初めて確認されて以降、継続して生育し、分布範囲が拡大しています。



チゴガニ



コアマモ

【光環境による大きな変化がみられなかった項目】

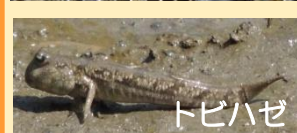
- 貝やゴカイ等の底生動物の種類構成や、底質の有機物量については、光環境による大きな変化がみられませんでした。これは、光環境の変化よりも河床材料等に左右されていると考えられます。



ゴカイ類
貝類

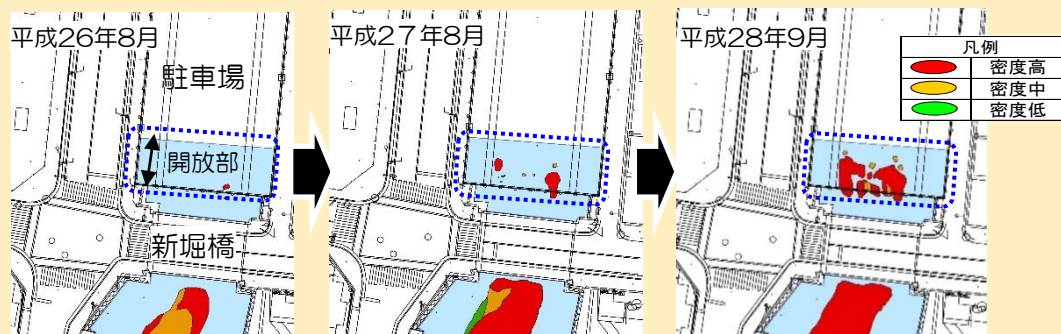
【その他の項目】

- 干潟に生息するトビハゼは兩岸の干潟で、シオマネキは西岸の干潟で、それぞれ平成28年の調査において確認されています。



トビハゼ

【暗渠開放部のコアマモ分布域の変化】



暗渠開放部を含む新堀川全体における希少種の生育・生息状況

- コアマモ群落及びトビハゼの個体数が増加しており、それらの生育・生息に必要な良好な環境が維持されていると考えられます。ただし、コアマモについては、水深や日照条件等によっては、群落が形成されない場所もみられました。
- ※シオマネキについては、別途記載